

みんなで学ぶ 食と農の

OMOTENASHI・MOTTAINAI・SATOYAMA

(おもてなし)

(もったいない)

(里山のころ)



伊藤園は、2014年11月11日、ESD: JAPAN MODEL(注)
「伊藤園のESDに関する取り組みー茶畑から茶殻までー」
を事例として、「みんなで学ぶ食と農のOMOTENASHI(おも
てなし)・MOTTAINAI(もったいない)・SATOYAMA(里山)の
ころ」をテーマにしたシンポジウムを開催しました。

みんなで協働して創る未来へ

本シンポジウムは、2014年11月10日から12日にかけて、愛知県名古屋市で開催された「ESDユネスコ世界会議」の併催イ
ベント「ESD交流セミナー」の一つとして、伊藤園が企画したもので、第8代ユネスコ事務局長の松浦晃一郎氏、「和食会議」会長で
静岡文化芸術大学学長の熊倉功夫氏、国連ハビタット親善大使であいち海上の森センター名誉センター長のマリ・クリスティー
ヌ氏、異文化経営学会会長で桜美林大学教授の馬越恵美子氏、「田めになる学校」校長で東京大学教授の鷺谷いづみ氏を
パネリストに迎え、元アナウンサーで三菱地所(株)開発推進部マネージャーの中嶋美年子氏が司会進行役、(株)伊藤園常務執行
役員 菅谷秀光がプレゼンター・ファシリテーターを務めました。

第一部では、菅谷から伊藤園の取り組みをご紹介します、第二部では、人と自然、異文化交流、和食文化、世界遺産等について
、食と農を中心に様々な角度からパネルディスカッションが行われました。会場からのご意見、ご質問もあり、パネリストの皆様
から反応をいただきました。プレゼンター・パネリストからの主な発言は以下の通りです。

(注)「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラムの活動の集大成として、日本の優れたESD実践事例を収録したものです。

第一部 伊藤園の取り組み紹介

ESDで明日を考える人材育成を

(株)伊藤園 常務執行役員
菅谷秀光

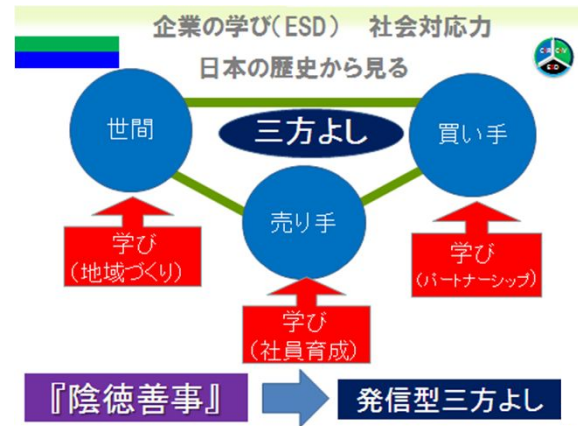


菅谷: 最近、ユネスコ世界文化遺産として登録された富士山、和食、手すき和紙
など、日本の伝統文化が認められ、内外で注目を集めています。世界遺産など
の保存には、社会課題への複合対応を目指し、多くの人々の協力が必要です。
その感度を育み、「みんなで明日のことを考える時代」です。

グローバル化の流れの中、これからの時代は本業を通じて社会構成員みんな
が社会的責任(SR: Social Responsibility)を果たす必要があります。そのため、
関係者やパートナーとの協働を通じた人づくり、地域づくりが求められており、
企業も参加すべきと伊藤園は考えています。

今、企業・組織には、人と人とのつながりを通して、CSRによる社会対応力をつ
け、CSVによる共有価値を創造し、そのためにみんなで学ぶESDの手法活
用による人材育成の3点が求められています。伊藤園はこの3点を経営に生か
しています。

これにより日本の商慣習にある「三方よし」を、これとともにある「陰徳善事」を
見直し「発信型の三方よし」を目指していく必要があります。



効果的発信には、わかりやすい課題提起が有効であり、このため、本日は、次の3つの視点で考えたいと思います。

第1は、和食文化と密接な関係にある「おもてなし」の視点。

第2は、循環型社会（(例)手すき和紙など）につながる「もったいない」の視点。

第3は、身近な自然を守る活動として「里山」の視点。



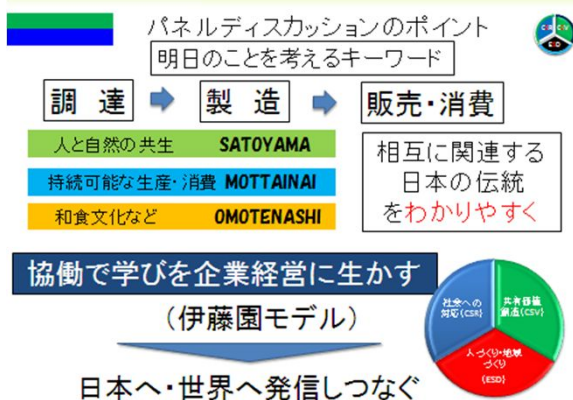
本日は、各分野の第一人者にお越しいただいており、世界フォーラムでご紹介された「伊藤園ESDモデル」を例としてご議論し他の組織が活用できるよう、ヒントを抽出したいと思います。会場の皆様とともに考え、議論の内容をまとめ、日本の「いいモノ」「いいコト」を世界に向けて発信していきたいと思ひます。

伊藤園は、「茶畑から茶殻まで」という本業を通じた関係者との協働による「持続可能な生産と消費」に特色があります。生産から消費の価値連鎖のバリューチェーンを通じて実践しており、特に茶産地育成事業は農家、行政、地元の方々とのパートナーシップによる人づくり、地域づくりにつながっています。この他、「お茶で日本を美しく。」の里山、茶殻リサイクルシステムのもったいない、ティーテイスターのおもてなし、新俳句大賞の文化への貢献などの幅広い取り組みを行っています。10月からは、環境省選定のESD自由俳句をパッケージに掲載して政策への協力をしたお〜いお茶も展開していますので、是非、お手にとってご覧ください。伊藤園はこれらの活動を通じ、「communi“tea”」の形成を目指しています。



※伊藤園の登録商標です。

第二部では各分野の第一人者をお招きし、ESD伊藤園モデルを通して、パネルディスカッションを行います。ESDを分かりやすく言うと、“ともに知る、学ぶ、つながる”ということです。参加者の皆様にとって、本日のシンポジウムが明日のことを考えるヒントになれば幸いです。



第二部 パネルディスカッション



中嶋氏: 私は三菱地所で東京丸の内を中心とした街づくりをしています。魅力ある街づくりにはコミュニティの力は非常に大切で、人と人のつながりをテーマにしています。そのご縁で、伊藤園常務執行役員の笹谷氏とは東京でも幅広く意見交換させていただいています。



元アナウンサー 三菱地所(株)開発推進部マネージャー
中嶋美年子氏

人と人のつながりを通して、CSRによる社会対応力をつけ、CSVによる共有価値を創造し、そのためにみ

んなで学ぶESDの手法は、伊藤園の地域でのコミュニティづくりの特色であり、参加者の皆様にも参考になるのではないのでしょうか。本日は、私も司会としてだけでなく、パネリストの皆様からヒントや気付きを得て帰りたいと思います。

伊藤園のCSR報告書2014では、「ともに学ぶ。つながる。明日の未来へ——」をコンセプトに、全国の営業拠点長の皆さんが集合してパズルのようにつながっている様子が紹介されています。これが人と人のつながりを表す伊藤園のESDであり、白地のピースには本日お集まりの皆様がつながっていくのではないのでしょうか。



「和食会議」会長、静岡文化芸術大学学長
熊倉功夫氏

熊倉氏: 和食が世界無形文化遺産になり、一昨日の11月9日に認定書が交付されました。その意義は“和食の危機”ということであり、和食の素晴らしさを次世代に伝承することが現在の課題になっています。

和食の良さは季節ごとに旬の食材を活かした健康に良いもので、一汁三菜とごはんという組み合わせです。もちろんお茶も和食に欠かせません。和食文化はおもてなしやもったいないとも深い関係があります。おもてなしの本来の意味は“ご馳走する”ということです。ご馳走は相手と自分とのコミュニケーションであり、互いに高め合うことがおもてなしです。これをいかに伝承していくかが今回のテーマである持続可能な開発のための教育です。私は学校給食のメニューに和食を入れるべきとの運動も展開しています。国内では和食はピンチですが、海外では人気が出ています。

グローバル化の中では、海外で受け入れられていくための変容を許すことも大切です。

私は茶の湯文化学会の会長も務めています。茶の湯はお茶を通じて相手のことを考え、同じ心を共有し、共有関係を築くことでもあります。伝統はその時代、時代につくられたものです。従来の伝統に縛られるのではなく、今の時代にあった新しい伝統をつくっていく必要があります。伊藤園の茶産地育成事業やティーテイスター制度はまさにこれからの新しいお茶の伝統をつくる取り組みです。

本日は、里山、もったいない、おもてなしという3つの視点は相互に関係があり、この3つの視点が伊藤園の事業の中にまとめられているということが理解できました。食の基本である農業事業はより一層重要性を増すと思います。農業事業の付加価値を高めて、和食を世界に広めていただければと思います。

今回の企画は11月の和食月間、11月24日の和食の日とも関係し、とても有意義な機会となりました。



シェアする感度が大切

if we don't share.”——— 今こそ、“地球がもったいない”という考えの下に、シェアする視点が大切です。

異文化経営学会会長、桜美林大学教授
馬越恵美子氏

馬越氏: 先日訪れた南極ではまっさらな地球の重要性を改めて感じました。“It's a waste,

現在ではこのような考えを企業の経営戦略に活かすことが求められています。経営には多様な人たちが参加し

知恵を出す“ダイバーシティ”や“異文化理解”が重要です。本日のパネリストの皆様も女性4名、男性3名、会場にも女性が多数来場されています。女性を活用したダイバーシティを感じられて素晴らしいと思います。ダイバーシティをベースに日本文化の多様なおもてなしを世界に発信する、異文化経営学会会長としての経験からみると、このような視点を企業「経営」の中に取り込んでいくことが重要ではないでしょうか。



特に、伊藤園のcommuni“tea”という考えは、“みんなで一緒にお茶を飲もうよ”という感じが出ていてとても素晴らしいと思います。最近ではシリコンバレーでもお茶がブレイクしていると聞いていますが、世界中でもっとおいしいお茶が飲めるようになるよう伊藤園には期待しています。

おもてなし、もったいない、里山という今回の3つのテーマを組み合わせた伊藤園の経営は、おいしいお茶づくりに加え、健康性の面からも重要であり、これはまさに伊藤園のCSRやESDを活用した経営戦略ですね。組織や企業に多くのヒントがあるのではないのでしょうか。



もったいないを分かりやすく発信

マリ氏: 私が名誉センター長を務める「あいち海上の森」は、伊藤園も企業連携で参加していただくなど、まさにみんなで一緒に学べる場としての里山です。

里山という概念は、世界中でそれぞれの考え方があります。アフリカのサバンナにはアフリカなりの里山がありますし、日本の里山は水や緑に恵まれた豊かな里山です。しかし、持続可能なシステムは同じです。そのシステムをどのように守るか。伊藤園は企業として持続可能な仕組みを作っているところが素晴らしいと思います。

「もったいない」も世界に伝えるべき考えの一つです。直訳すると“it's a waste.”ですが、このままでは「もったいない」に含まれる素晴らしいたくさんのニュアンスが伝わりにくいと思います。日本人が培ってきたもっと深い考えや感性があることをうまく世界へ広めていければよいのではないのでしょうか。もったいないというテーマだけでも1時間30分のシンポジウムができるくらいです。

国連ハビタット親善大使、あいち海上の森センター名誉センター長
マリ・クリスティーヌ氏

身近な例としては、外国で折り紙を折っていると関心をもたれます。これが伊藤園の茶殻リサイクルシステムによる茶殻折り紙でお茶の香りがすると五感を使った情操教育にも役立ちます。英語俳句も外国人には人気です。このような伊藤園の取り組みは明日のことを考えるヒントになると思います。

異文化コミュニケーションとして、今回の3つのテーマを分かりやすく世界に発信していきたいと思います。

鷺谷氏: 「世界一田めになる学校」は、“田んぼ”をテーマに、地域の水田と生物多様性の重要性や人と自然の共生を考えるプロジェクトです。コウノトリ、トキ、マガンなどの大型の水鳥をシンボルとし、自然と共生する地域づくりを進めている宮城県大崎市、新潟県佐渡市、兵庫県豊岡市、栃木県小山市の4市が主催し、多様な関係者との協働により成り立っています。伊藤園にも企業として参画いただくことで、活動の広がりを見せています。

生命の40億年歴史の中で、生物が進化で身につけた戦略に学び応用するためにも生物多様性を失わせてはならないし、人類ホモ・サピエンスの古い時代からの営みが今でも続いている場所がさつやまです。田んぼやその周りの里山に学ぶことが子どもたちの心に響く持続可能な開発のための教育につながると思います。

里山は日本のこころ

「世界一田めになる学校」校長、東京大学教授
鷺谷いづみ氏



松浦氏: 地球が危機に瀕している。——このことをみんなに理解してもらうためにESDの手法が重要です。教育も学校教育のみならず、幅広い社会教育、生涯学習、実践教育を含めてみんなで考える時代です。

伊藤園が環境省のESD自由俳句をお〜いお茶に掲載して周知していることは注目すべき取り組みですが、私は中でも「この地球(ほし)の未来を託すESD」という未来大賞の俳句がまさにESDを言い表していると思います。

ユネスコの世界遺産は、祖先から受け継いだ貴重なもの、大切なものを守る仕組みで、私も第8代ユネスコ事務局長として登録作業に関わってきた経験からいかにそのままの形で守るかが重要です。これを理解するため、里山、もったいない、おもてなしという3つの精神が重要であり、分かりやすく発信することは良いことです。

明日の地球に向けてみんなで学ぶ ～企業も参加できるモデルを世界に発信～



今は、企業や組織が本業を活かして活動に参加する時代です。産業界、行政、教育関係者など、みんなで協力して世界遺産を守る努力が必要です。

これまでのディスカッションを踏まえ、私なりの考えを盛り込んだ整理として、次の5点をお伝えしたいと思います。

- ①「人と自然の共生」: 人が増え過ぎている一方で、自然は人に荒らされています。人と自然の共生という考えは日本が誇るべき伝統です。この考えを世界に発信するだけでなく、実際に教えてあげることが大切だと思います。
- ②「和食とお茶」: 持続可能な生産と消費に関連します。自然素材は自然のままという考えが大切です。世界無形文化遺産になった和食やお茶の精神を日本国内はもとより、世界に伝えていく必要があります。
- ③「おもてなし」: おもてなしは日本の重要な文化です。国内だけでなく外国人も一緒にみんなで学ぶことが大切です。
- ④「発信」: 今回、岡山、名古屋で世界会議が開かれました。発信という面ではとても大きいと思います。大都市だけでなく、もっと地方でも開催しても良いのではないのでしょうか。



第8代ユネスコ事務局長
松浦晃一郎氏

⑤「伊藤園モデル」: ESD伊藤園モデルの特色は、ユネスコが求めている、ESD政策への協力、社内体制の整備、実践する教育者の育成、若者への継承、地域活性化という5つの要素をバランスよく盛り込んであるところです。特に伊藤園の五番目の地域活性化に本業で対応しているところに特色があります。このようなモデルは、今回お集まりの企業や組織の皆様にとり良いヒントになるのではないのでしょうか。

ESD伊藤園モデル

伊藤園は、5つの点でESDの取り組みを強化します。

1. 政府、自治体等が推進する**持続可能開発政策への積極的な協力**
2. **全社的なESD推進体制**(CSR推進委員会にESD推進部会)の創設
3. ティーテイスター制度を活用した**実践する教育者の育成**
4. **若者**を含む日本の伝統文化への理解と普及促進の機会の提供(「お〜いお茶新俳句大賞」など)
5. 地域の方々とともに考え、**地域活性化へ貢献**(茶産地育成事業の農業技術支援など)

本シンポジウムのまとめ

本日の議論による明日へのヒント

- ①「社会対応力」を磨き、**本業を通じて実践する。**
- ②**パートナーとの協働**により、Win-Win関係を構築する。
- ③**人づくり、地域づくりのため、みんなで学ぶ。**
- ④OMOTENASHI/MOTTAINAI/SATOYAMAのように、**分かりやすく発信する。**
- ⑤組織、企業は**関係者との協働**で持続可能な社会の実現に貢献する。



左から、中嶋氏、馬越氏、笹谷、松浦氏、鷲谷氏、熊倉氏、マリ氏